書評

編集・発行
関西大学生活協同組合
書籍部「書評」編集委員会
吹田市千里山17
電話(381)1953内線326

政治学の課題と政治思想

◆柴田高好著

原理論的な解明

マルクス主義政治学の確立へ

（一）

この著作は「第一部は、主に政治や国家の原理・原理的把握とマルクス主義における政治思想史研究の重要性の指摘が中心であり、第二部はいわばそれの現代日本政治論と一とくに憲法、国家論と平和一への適用という」（あとがき三一七頁）で内容が分離されている。第一部の内容は、著作者自身のライフモチーフであるらしい「マルクス主義政治学」確立の素材提起をしている。

著者の「マルクス主義政治学」確立の緊急性とその必要性は、「幻想としての憲法とその止揚」に凝集されている。もっとも、「マルクス主義政治学」なるものが、いかなるマルクス主義政治学の中で位置するのかは、恐らく、同著者の「マルクス主義政治学序説」を判読すればわかるだろうと思うが。

ただ、著者の考える「資本主義政治学」の内容は、既成マルクス主義の闇において、レーニンの「国家と革命」を軸とした所を超えていない時一つの有効性と、「実践」における大きな指針となるかもしれない。それは、また著者自らが語っている如く「政治学者が、政治学者固有の学的実践を放棄し、何も政治学者でなくても可能な仕事（その仕事の価値評価をいっているのではない）にうつつをぬかして自己満足しているといったもの」（本文一〇一頁）に対する、科学的反論を用意するかもしれない。なぜなら、著者自身の問題提起の契機の発端は、この二つにあるし、前者は「スターリン主義国家論の批判」、後者は、近代政治思想史においてその名を築いたロック、ホッブス、ルソー、シーエスなどとマルクスの学的関係を弁証法的に思考せんとしているのである。後者の内容は、また近代政治学の雄といわれる丸山真男などの「伝統的マルクス主義において国家論と政治過程論とが理論的に総合されていない」（「現代政治の思想と行動」下巻）といった内容などに極めて論理的に解答しえる素材を提供するのではないであろうか。

（二）

著者の考える「マルクス主義政治学」について、その内容が、この著だけでは、自分に判読し難いから、深入りはしないが、少なくとも前述したような、ぼくの考えから、それには、大いなる興味をもつ。

第一部の原理論的考察は、極めて示唆深い内容が折り込まれている。第一部は大別すれば三つになろう。第一は、〝政治と人間〟とまとめ上げられるであろう。政治という非行が、人間解放の糸口であり、教育の非人間性を生まずにおかぬ「現代社会」の本質を究明している。それは「疎外された人間解放」を綴って居るといってよいであろう。第二は、国家論。国家の解釈は一つにはスターリンの教条主義的傾向の現実的形態としてのスターリン独裁、二つには、戦後世界体制の「国家独占資本主義」成立による「繁栄する資本主義」の現存という基盤によってか、大きく混乱を余儀なくさせている。「国家の本質と機能との間の区別と連関の根本的なとらえ方がはっきり」（本文七七頁）していないといっても差しつかえないであろう。著者は、明解に問題を浮き彫りにしつつ国家の本質とその機能を説明している。それは、また、決して、今井則義的な、機械論でもなく津田道夫・三浦つとむ的折衷主義とも異なり、梅本克己が「人間論」で展開した内容を深めているといえる。第三は近代政治思想とマルクス主義科学の関連をつけ、同時に、マルクス主義者としての政治理論（マルクスの「フランスの内乱」レーニンの「国家と革命」ローザ、グラムシ）を評価している。第一部は、総じて、原理的側面が強く、その内容も読みごたえはある。

ただ、ここで、一つの疑問を提起することにしよう。

「社会主義運動は、ブルジョア国家権力の支配下にあるそもそもの始めから、そのための自己権力＝社会主義権力を創出し、これを発展せしめてゆかねばならない。社会主義的変革は、それが国家権力を握った時に始まるものではなく、ブルジョア国家の矛盾的二重性格との日々の対応・対決に、その営々たる積重ねの中に不断に行われているのである」（本文九六頁）この文の意味は、どうも理解し難い。なぜなら、このことの内容と、ローザやグラムシなりの政治理論を「平和革命」と名称づけることと関係があるのではないか。また、いわゆる市民主義者がいう「権力奪取手段の急進性と社会の質的転換とを混同しないこと」という言明との関係は、どうなっているのかと。ここらあたりのあいまい性は、第二部のテーマーとしてある第一部での原理論を「現代日本政治論への適用」の時に、疑集して出てくる様な感懐をもつのである。

（三）

第二部の内容は、今触れた様に「平和」と「憲法」に焦点を合わせて、時評したものと、日本共産党の憲法論を批判したものが、主なる展開となっている。論理展開は、先にふれた如く、「現状分析」に関しては、あまりにも一般論に陥ち入っているのではないかと考えざるを得ないこと、ある種の固定観念を前提にして論述している傾向もないことはない。（日本憲法への特殊な位置だけ…彼の原理的に考察した「法」内容といかに段階的とはいえ相違がある）もちろん、時評論文であるから、厳密性を要求されえないかもしれないが、一定の「幻想性」に論文全体をオーバーラップしていることは事実である。

例えばそのことは、「平和共存の原理と日本」にもあらわれている。「平和共存とは、このように自己否定の政治としてのマルクス主義政治の原理が、現在、国際的に現実化される可能性を意味する。それは単に当面の一時的な平和、現状維持でも、また、いますぐ帝国主義体制の死滅による真の恒久平和をもたらすというものでもなく、現在の一点においてこの両者を媒介しつつ、前者を後者へおすすめていこうとするものである」（本文一八八頁）こういう形の表現であれば、なにかきつねにつまれた様な気がする。第一部で考察していたように、「政治そのもの非行性」が、ここでは、一転して、楽観的言辞になってしまっているのである。また、ある場合には、極めて道徳的要請的な言辞での現実の拘わりを説明している。確かに、「政治」学であるから、その点への鑑別を明確にしなければならないかもしれないが、ともあれ、柴田高好の問題意識なり、状勢への学問的拠点は、非常に興味ある。それはまた、マルクス主義ースターリン主義の形骸化ーに大きな空洞をもっている現在、その穴埋めの作業にとって貴重だと思うし、最近の論壇の傾向としてある、あらゆる分野での共通の地盤に基づく、討論の素材提起の役割を担ってくれると思う。

（三一書房刊・九六〇円）

（田島　克己）

異端宣言

植田逸雄著

転倒した闘いの受容

何からの異端か

美しすぎる精神の潔白

自ら異端と名のるのは何と響きの良い事だろう。僕らの同時代人にとって、それは一つの解放の徴であり闘いの言葉である。しかし僕らにとってそれはまた自らを欺瞞する言葉でもあるのだ。僕らの世代を許してある知識人は僕らの仲間を「クズレ左翼」と呼んだ事がある。始めからクズレている僕らの行動力と思考の飛躍する現実を、知識人と名のる人々はこう表現せざるを得なかったのかもしれない。それほどぼくらの時代は危険な要素を含んでいるのだ。異端を宣言するにしても「何から」「何に対して」異端なのか自明であって確かとしないぼくらは今一人の仲間の「異端宣言」を手にして、期待とおののきお待って頁を開かねばならない。

戦後二十年、あるいは、維新百年の言葉と目標によっていまや日本人の思想と歴史の転換点ということがよく聞かれる。文明開化後百年の日本の歴史に目標を定める迄もなく、現実の僕らをとりまく生活の端々を見つめる事によってその生活と文化のシンクレティシズムは矛盾を顕在化させる事なく一切を融和しつくしてしまおうとしているのを知るだろう。日本の構造的矛盾と言う視点から見れば、それは、賃労働と資本の矛盾のテーゼによって解消されるかもしれない。この自明なテーゼに従がえば、異端は、この体制全てに反対する思想と大衆の叫びであるかもしれない。しかし、彼、植田逸雄君の異端の叫びはその様な一般性に解消してしまうものではなかった。

今、戦後が問われ、近代日本が問われる情況の背後は、一般的テーゼと、大衆の一般性が支配の「アリ地獄」に吸収されてしまう現実がある時代なのだ。それは知識人のいう様な左翼性思想そのものにもっとも危険なヘツライを見、大衆の叫びにも孤独なセンドウ者として立つ。異端者の姿を象徴する時代であるのだ。植田逸雄君はそれを神への従順とその反逆から開始した。安定した中世は支配的イデオロギー＝キリスト教の人民の吸取の時代であった。正統派ローマ教会に対する次々に起こる異端は道徳的潔白と厳しい共同生活によって大衆をとらえ、ローマ体制に徹底した抵抗を試みた。しかしローマはそれをドミニカンの厳しい修道生活を対置物として生み出す事等を通して大衆の、いや異端者の精神を吸収し続けた。ここに安定した中世の精神的な背景があった。

しかし、これを決定的に打ち破る力となったのは、プロレタリア的禁欲主義によって大衆を組織し、ローマと偽瞞せる改革者＝ルターに対して闘ったトマス・ミュンツアーであった。中世的異端の系譜はエンゲルスも指摘するように精神の潔白とこのプロレタリア的禁欲主義に立脚する様その改革運動であった。植田 逸雄君 の異端 の叫びは最初に現代の教会に向けられた。

聖と俗を分割した近代に於けるキリスト教会は、彼の信仰をしていわしめるなら、支配の独占する犯罪に対する徹底した抵抗する純潔な者の集団であるはずであった。しかし、現実には社会は支配の悪を知りつつそれに有力な加担者として働く集団にしか過ぎなかった。彼は苦悩し、抵抗した。そして語った「絶対者とは偶像以外の何者でもない」と。それからの彼は偶像でない何かに対して、それを明らかにしようと努力し続けた。しかし、それが明らかになったとは思わない。彼が書き続けた詩の中でそれは叫びとなって表われた。ある時はセンチな歌としてある時はロマンな歌として、でも、その中を一貫して流れたものがあった。それは異端というには余りにも美しすぎる精神の潔白さであった。それは抑圧された者自らを他と区別する怒りとニヒルな感情を含み、それでいて美しい何ものかがある。

僕らは彼のそんな異端宣言を読んで、僕らの中の偉大な犯罪者とよごれた聖者を呼びおこされるだろう。それはあるいは中世的異端の系譜の一部分であるかもしれない。しかし、明治百年が体制の精神なき西洋文明の取入れであるとするなら、植田君的異端の系譜の受容とその闘いは、僕らに始めてクズレ左翼の異端者としての地位を与えてくれるのではないだろうか。彼の時代錯誤的な試みは真実にせまる何物かを見つける媒介を提供するだろう。

彼の詩集は大きく分けて三つに別れている。神への反逆から現実の価値感を転換しようとした時代「異端宣言、女達に」。高島屋前の坐り込みに反戦の唄を送った時代。「大陽と大地と民衆に」死をまじかにして、それにたえた時代「傷病兵の唄」わずかの時に疑惑して詩をかきつづけたこの「異端宣言」はぼくらに何を残すか君の心で読んで語って欲しい。これはそんな本であり、ぼくのとらえ方もそん勝手なとらえ方の一つである。

（大貫照一）

第一回に「ニーチェ」中公の「世界の名著」

中央公論社は、さきに「世界の文学」「日本の文学」「世界の歴史」「日本の歴史」を続刊し、〈知識の共通基盤〉の確立をめざしてきたが、今度は、「世界の名著」全66巻を刊行する。これは、本紙二面下段にあきらかなように東西三千年にわたる偉大な著作を網羅して、平明な新訳と行きとどいた解説とによって思想古典への大道を開こうというもの。第一回配本の「ニーチェ」（46巻）は、書籍部にて発売中である。毎月一回一冊配本でB6変型判函入特製本、図版多数入、平均五四〇頁、解説、年譜、月報付で四八〇円。

全66巻の内容はつぎのとおり。

①バラモン教典、ジャイナ教典 原始仏典　編集　長尾　雅人
②大乗仏典　編集　長尾　雅人
③孔子、孟子　編集　貝塚　茂樹
④老子、荘子　編集　小川　環樹
⑤ヘロドトス、ツキュディデス　編集　村川堅太郎
⑥⑦プラトン　編集　田中美知太郎
⑧アリストテレス　編集田中美知太郎
⑨ギリシアの科学　編集　田村松平
⑩諸子百家　編集　金谷　治
⑪司馬遷　編集　貝塚　茂樹
⑫聖書　編集　前田　護郎
⑬キケロ、エピクロス、マルクス・アウレリウス　編集　鹿野　治助
⑭アウグスティヌス　編集　山田　晶
⑮コーラン　編集　藤本　勝次
⑯マキアヴェリ　編集　会田　雄次
⑰エラスムス、トマス・モーア　編集　渡辺　一夫
⑱ルター　編集　松田　智雄
⑲モンテーニュ　編集　荒木昭太郎
⑳ベーコン　編集　福原麟太郎
㉑ガリレオ、ホイヘンス　編集　豊田　利幸
㉒デカルト　編集　野田　又夫
㉓ホッブス　編集　永井　道雄
㉔パスカル　編集　前田　陽一
㉕スピノザ、ライプニッツ　編集　下村寅太郎
㉖ニュートン　編集　河辺　六男
㉗ロック、ヒューム　編集　大槻　春彦
㉘モンテスキュー編集井上　幸治
㉙ヴォルテール、ディドロ ダランベール編集　串田　孫一
㉚ルソー　編集　平岡　昇
㉛アダム・スミス　編集　大河内一男
㉜カント　編集　高坂　正顕
㉝フランクリン、ジェファソン トックヴィル編集　松本　重治
㉞バーク、マルサス　編集　水田　洋
㉟ヘーゲル　編集　岩崎　武雄
㊱コント、スペンサー　編集　清水幾太郎
㊲ミシュレ　編集　桑原　武夫
㊳ベンサム・J・S・ミル　編集　関　嘉彦
㊴ダーウィン　編集　今西　錦司
㊵キルケゴール編集　桝田啓三郎
㊶ラスキン、モリス　編集　五島　茂
㊷プルードン、バクーニン クロポトキン編集　猪木　正道
㊸㊹マルクス、エンゲルス　編集　鈴木鴻一郎
㊺ブルクハルト編集　柴田治三郎
㊻ニーチェ　編集　手塚　富雄
㊼デュルケーム、ジンメル　編集　尾高　邦雄
㊽パース、W・ジェームズ デューイ　編集　上山　春平
㊾フロイト　編集　懸田　克躬
㊿ウェーバー　編集　尾高　邦雄
(51)ブレンターノ フッサール　編集　細谷　恒夫
(52)レーニン　編集　江口　朴郎
(53)ベルグソン　編集　沢瀉　久敬
(54)マイネッケ　編集　林　健太郎
(55)ホイジンガ　編集　堀米　庸三
(56)オルテガ・イ・ガセット マンハイム　編集　高橋　徹
(57)ケインズ　編集　宮崎義一他
(58)ホワイトヘッド、ラッセル ウィトゲンシュタイン　編集　山元　一郎
(59)マリノウスキー、レヴィ＝ストロース　編集　泉　靖一
(60)バジョット、ラスキ、マッキーヴァー　編集　辻　清明
(61)トインビー　編集　蝋山　政道
(62)ハイデッガー編集　原　佑
(63)ガンジー、ネルー　編集　蝋山　芳郎
(64)孫文、毛沢東編集　小野川秀美
(65)(66)現代の科学編集　湯川秀樹他

●書籍部推薦図書

▼岩波新書
「日本経済はどうなるか」
大内・有沢・脇村・美濃部・内藤著
高度成長の時代は終った。日本経済は不況に当面している。大内兵衛氏ほか四人の権威が各方面にわたって分析した示唆に富む必読の討論。

▼岩波新書
「キューバ紀行」　堀田善衛著

▼世界の大思想 24　（六三〇円）（河出書房）
「キルケゴール」（解説・務台理作）
おそれとおののき　桝田啓三郎訳
哲学的断片　矢内原伊作訳
不安の概念　原佑・飯島宗享訳
死にいたる病　松浪信三郎訳

▼世界文学全集 15
「スタンダール」（筑摩書房版）
赤と黒・ヴァーニーナ・ヴァーニーニ

現代日本の教育

清水義弘著

植松健郎

今日の日本の教育はどこかが狂っているように思われる。良き大学に入るために良き高校を、又その高校に入るためによき中学を、更に又という次第で今や幼稚園までがその影響をうけている。近頃では幼稚園児に家庭教師までつける家庭が現われたと聞く。小・中学生はその殆どが塾に通い、学校以外で、何らかの教育をうけようとしている。日本中の子供が大学を目ざして狂ったように勉強しているようにさえ思える。この現象を見て日本人は、世界に類を見ない勉強ずきな民族であると思う人は先ずなかろう。一体何がこのように日本の教育を混乱させたのであろうか。また艱難辛苦の末やっと入学した大学は果してそれにふさわしい最高の教育を施しているであろうか、同一年令層の一五%のものが大学生であるが、これほど多くのものが高等教育を受ける必要があるだろうか。われわれは特にベビーブームの四十一年の入学試験を前にして大学とは一体何ぞや、と熟慮してみる必要があるだろう。

驚くべき教育国家

「学歴尊重」を反映

年々大学志願者が増え、それに応じて次々と新しい大学が創設されている。かつては駅弁大学といわれたが、今日では私鉄沿線におよそ各駅毎に大学があり、まさに各駅大学と言ってもよいぐらいである。これ程までに大学が増設されてもなお受験地獄は解消されず、浪人が増える一方である。一体大学はまだ足らないのであろうか。大学の数は米国、ソ連について日本である。驚くべき教育国家である。それでもなお大学が少なすぎるという意見もある。しかしこの意見は大学が名実共に高等教育を施す機関であるということを論外にしていると考えられる。大学という名だけで乏しい教授陣でもってマス・プロ教育でお茶をにごしている大学もあれば、充分な教授陣、充分な施設をもって真の高等教育を施している大学もある即ち大学にもピンからキリまでありこれらを区別せずにいたづらに大学の数を増したところで、教育費がかさむばかりで、ますます不充分な教育費のもとにますます不充分な大学が出来上るばかりである。大学教育が高等教育でなくただ証明書を発行する機関であるならば、全入制になるだけの大学を増やせばよいのである。しかしこれでは大学の使命が失われるだけであろう。大学とは真の意味で高等教育を施す機関である。にもかかわらずこれ程多くの入学志望者があるのに何故であろうか。答は簡単である。それは「学歴」である。今日ほど学歴尊重の思想が大衆化している時期はないであろう。学歴尊重は学歴偏重となり、それがますます教育を破壊しつつある。民主教育、機会均等の旗じるしのもとに大学は大衆化した。がこれは質的な面からみると教育水準の低下を来たした。教育費の面からみてもわかる通り、日本の一人当たりの教育費は大学については年間一一、二万円程度でありイギリスの九〇万、アメリカの八〇万、フランスの五〇万と比較するといかに「安かろう悪かろう教育」がなされているかがわかる。イギリスではまさにエリート教育であり、同一年令層のわずか一・五%しか高等教育をうけさせない日本ではその十倍にもなるが、米国での権威ある調査によれば高等教育を受けるアカデミックな能力の持ち主は同じ年令層の約二・三%にすぎないとされている。この点から見ると、日本では非常に不経済なことがなされているとしか言えない。高等教育を受けるに耐えないものまでが機会均等のお蔭で受けているのであり、また日本では入学さえすれば卒業出来る仕組になっている。水準の低下するのは当然である。

教育とは投資か

企業の訓練所に

日本の国民所得は先進諸国に比較してはるかに低い、にもかかわらず世の親たちは教育費を得るために、明けても暮れても働きつつ学歴という証明書を子供にとらせるのである。教育を投資と考えているのである。ところがもし教育が投資ならばこれほど効率の悪いものもなかろう。産業界はすべての大学卒を消化するほど大きくはない。産業界が要求するものは限られたエリートだけである。従って大学卒にふさわしい仕事は先ずないといって差支えない）その上大学受験のために費された費用、浪人中の損失所得まで考慮すれば莫大な浪費がなされているといえる。まさに日本は教育貧乏になろうとしている。教育政策からみれば、公教育費をいかに増大したとしても、それが国民経済に寄与されることなくただ大企業の先棒を担うことにしかならないのである、即ち国民は経費の安く、かつ高い社会的評価をもつ国公立を「有利で安全な」投資と考えており公教育を私事化しようとしている

かれらは大企業に就職し或る程度の地位をうる。大企業は公費で教育された多数の学卒を毎年無償で雇い入れて、停年まで働かせる公教育が企業によって私物化されているのである。煎じつめると教育投資は大企業を間接的に潤すだけなのである。しかも高等教育を受けたものしか出来ない仕事というのはそうざらにはないのである。本書の著者は「教育制度はもともと社会の機能の一つであるから社会から孤立し、独走することは許されない。たえず社会の変化に対応し、また自己を革新するものでなければならない。新教育制度はたしかに理念においてすぐれているがこのためにかえって社会の現実から遊離することになったとみられる。この制度は今日いちじるしく柔軟性を欠き、産業社会の進展に対応する力を失っている」とその序論でのべている。この理念は社会に対応する、即ち日本経済に役立つ人材を作り出すことである。この考えに立っては明らかに教育は投資である。しかし教育は投資であろうか。投資にしてはあまりにもその効率が悪い。少くとも高等教育においては投資であってはならないと考える。およそ経済界の要請に応じてその都度教育内容が変って行くという、いいかえれば経済界によって引きずられていく教育というものは学問ではなく経済界のための特別教育大企業のための訓練所と化して行くであろう。

真のエリート教育

高等教育は形式化

この著者が「安かろう悪かろう教育」改革をとなえ、教育費の有効な使用のために高等教育人口を同一年令層五—六%にとどめるよう提案するとき、それは社会的需要から結論づけられたものであるがその際社会的需要からではなく経済界をリードして行く人材をつくることこそ教育だと思うからである。即ち教育が経済に先行するものだと信じるからである。

そのためにエリートの真の意味での高等教育が必要であろう。今日の如く大衆化した高等教育では決してハイタレントを養成することは出来ない。現実には大企業では更に特別教育を施しているところもある。このような事情から見ても実に莫大な教育費の浪費のもとに高等教育がなされているのである。著者は教育人口を減少させる一手段として大学を出来るだけ多く作り、証明書発行機関としてどんどん証明書を発行すればその価値の下落によって大学志望者も減少するであろうとしている。或いはその逆に証明書、成績表一切を発行しなければよいとものべている。少々自暴自棄的なところが見られる。しかし後者の意見は義務教育も含めて考慮してよいのではなかろうか。証明書一切を廃止し、そのかわりに資格試験制度を考えればよいであろう。筆者は大学が真の意味で学問をするところであり、高等教育を施すところであるならば、証明書は一切不用であると考える。何んとならば志望者は勉強を好み、学問をしようとして来るのである故証明書という形式的なものは望まず内実だけを求めているはずであるからである。ところが現実はあまりにも形式的すぎるのである。それ故に各大学においてかくも授業料のアンバランスがあれ、内容においても格差があれ、浪人が社会問題となるほど志望者がどこも増えるばかりなのである。もはや日本の社会制度が変らない限り、いかに教育費の浪費といってもこんご大学志望者は増加する一方であろう。本書の著者のエリート教育制度はなるほど当を得た案ではあろうが今日の現実を見ればもはや問題は如何ともし難い局面まで来ているといえよう。「教育の水準を高め就学構造の高度化をはかるためには、従来の大学教育を不本意ながら高等普通教育とみなし、この上に大学院を設けて育成しなければならない」といわざるを得ないのである。

私学授業料は限界

学制改革のすすめ

教育学者でもない筆者には学制改革を論じる資格はないが、今日の異状さを見ると一言論じたくなる。筆者は、まず授業料のアンバランスをなくす必要を強く認める。今日の私学の授業料は中産階級にとってももはや限界にまで来ている。一方ではその十分の一にも満たない国公立がある。子弟を私学に送っているものは税金を通じて国公立へも教育費を出している。二重の負担である。授業料はすべて均一であって然るべきであろうその結果は公教育費は一定であっても一人当たりの額は可成り上るはずである。また浪人期間は一年間しか認めないようにすればよいであろう。浪人のために生じる損失、所得、経費は年間五百億円に達するといわれる。莫大な損失を毎年繰り返しているのである。又入学すれば必ず卒業出来るという制度は考えなおすべきである。すぐれた人材を発見し、育成することが使命であるならば、高度な教育に耐え得ないものは去るべきであろう。すでに今年のベビーブームを前にして夜を日についで数多くの大学が作られた。出来た以上はこの広くなった門戸を活用し大学志望者を出来るだけ入学させ同一年令層の十五%という進学者の中から二—三%のハイタレントを発見、育成するようにすればよいであろう。教育費の浪費は一挙にして解決出来るものではない。しかしこの四十一年度を目標に昨今作られたような大学はいつまでも存続しつづけるとは思われない。投機的大学はどこまでも投機的である。高等教育機関たり得なくなるであろう。かくして自ら大学の枠から没落して行くであろう。この時こそ真の使命を守る大学をあらためて名実共に高等教育機関として区別し、学制改革の問題がとり上げられねばならないであろう。

世間が目下史上最大の入学難を、今日の日本の教育制度に疑念を抱きつつ見守っているとき、この書は我々に改めて学制改革を考えさせ、教育のあり方を再考させる意味で実に有意義であると思う。ここでは筆者は紙面の関係で我々にもっとも関心のある大学の問題をとり上げたが、本書の著者は教育制度全体にわたって問題をとりあげ豊富データーターを用いながら教育改革を論じている。

（独文専任講師）

東京大学出版会（五八〇円）

よく売れた本・読まれた本

日本経済はどうなるか	大内他四名	岩波	一三〇円
カラー版世界文学全集「戦争と平和1」		河出	六八〇
われらの文学「井上靖」		講談社	四五〇
憂鬱なる党派	高橋和巳	河出	三五〇
現代日本の革新思想	丸山真男他	河出	四八〇
現代法13巻（第八回配本）		岩波	六〇〇
筑摩世界文学全集「スタンダール」		筑摩	四五〇
漱石全集		岩波	一三〇〇
世界文学全集「人形の家」チェーホフ・イプセン		河出	四八〇

◆中央公論社刊・全66巻

世界の名著

新しい時代のための「やさしく読める古典全集」

〈編集委員〉大河内一男・尾高邦雄・貝塚茂樹・串田孫一・田中美知太郎・手塚富雄・福原麟太郎・松田智雄・湯川秀樹・渡辺一夫・永井道夫（参与）

第一回配本・46巻

「ニーチェ」　責任編集　手塚富雄

ツァラトゥストラ　手塚富雄訳

悲劇の誕生　西尾幹二訳

歴史の曲り角にはいつもニーチェが現われる。今またニーチェルネサンスが叫ばれている。組織の重圧にうちひしがれた現代人に力強く呼びかける予言者ツァラトストラ。処女作「悲劇の誕生」以来、失われた人間性の回復を終生の主題とした詩人哲学者の思想は、最適の訳者・解説者を得てここに躍動する。

◆本全集の6大特色◆

学界の権威の白熱的討議による体系的編集

編集会議は本会議・分科会など十数度開かれ、「何をもって名著となすべきか」のはげしい議論は学問の根本にまで及んだ

原典の香気を生かした平明で的確な最新訳

従来の翻訳は不必要に難解で読者を絶望させることが多かったが、今回は訳者の努力により、最も平明な訳文が生まれた

わかりやすくしかも質量ともに最高の解説

「世界の歴史」「日本の歴史」など、学問的に高度の内容を、懇切にやさしく表現する編集態度はわが社独特のものである

名著の魅力を飛躍的にたかめる豊富な図版

このような出版に図版を豊富に入れるという試みは今までになかった。時代の雰囲気に浸りながら味読していただきたい

大学の教養課程を一新する画期的百科全書

学制改革以来、教養課程にはまだ明確な指針がない。この全集は現代の教養体系を大学外から支えようとするものである

全知識家庭の渇きをうるおす清新な愛読版

家庭には共通の話題がなくてはならぬ。名著に親しむことにより、親と子、夫と妻は、精神的結合をさらに強化できよう

生協書籍部で発売中